

『40のハディース』学習ノート(第40回)

(『ムスリム新聞』40号、1995年10月掲載。)

「第36の伝承」

預言者(サッラッラーフアライヒワサッラム)は言われた。

「信者から現世の苦しみを一つ軽減させた者に、アッラーは彼から審判の日の苦しみを一つ軽減し給う。困窮する者に喜びを与えた者に、アッラーは彼に現世と来世において喜びを与え給う。ムスリム(の恥部)を隠した者に、アッラーは彼を現世と来世において隠し給う。また、しもべが兄弟を助ける限り、アッラーはしもべを助け給う。知識を求めて旅路を進める者には、アッラーは楽園の道を平坦なものとなし給う。アッラーの家の一つに人々が集まり、アッラーの書を朗読し、学び合う者には必ず安らぎが降り、慈悲が彼らを包み、天使が彼らを取り巻く。そしてアッラーは彼らをご自分の御許

に置かれる者のうちに覚えおき給う。行いが道を引き留める者は、血筋も道を早めることはない。」

ハディースの前半は、報いは行いに応じてもたらされることを告げています。例えば、「アッラーは慈悲深いしもべに慈悲を垂れ給う」、「アッラーは現世において人を苦しめた者に責め苦を負わせ給う」。あるいは、「審判の日、人は、かつてなかったほど剥き出しで、かつてなかったほど空腹で、かつてなかったほど疲労困憊して集められる。威力比類なきアッラーのために着せた者にアッラーは服を着せ、威力比類なきアッラーのために食べさせた者にアッラーは食べさせ、威力比類なきアッラーのために水を飲ませた者にアッラーは水を飲ませ、威力比類なきアッラーのために許した者をアッラーは許し給う」、「信者が空腹の信者に食べさせれば、審判の日、アッラーは彼に楽園の果実を食べさせ給う。信者が渴いた信者に水を飲ませれば、

審判の日、アッラーは彼にとっておきの酒を飲ませ給う。信者が裸の信者に着物を着せれば、アッラーは彼に樂園の緑の服を帰せ給う」。

また次のようなハディースもあります。「一人の樂園の民が審判の日、火獄の民を見下ろした。すると火獄の民の一人が彼を呼んだ。やあ誰某、おまえは私が誰か分かるか。いや、アッラーに誓って、私はおまえを知らない。一体おまえは誰だ。すると、言った。私は現世で、おまえが水を飲ませてくれるように頼み、それでおまえに水をやった者だ。思い出したぞ。すると、言った。では、おまえの主に私のために執成しをしてくれ。そこで樂園の男は至高なるアッラーに尋ね、言う。私に彼の執り成しをさせてください。するとアッラーはそれを命じ給う。そして男を火獄から出し給う。」

「現世で兄弟の苦しみを軽減させた者に、アッラーは彼から審判の日の苦しみを一つ軽減し給う。」「ここで「軽減させた」と訳した動詞「ナッフアサ」は「息をつかせる」という意味です。例えば、首が

詰まって苦しい者に一息いれさせることです。同じ意味を伝える別のハディースでは、「解き放つ」という意味の「ファッラジャ」という動詞が用いられています。これは苦しみを解消することですから、「一息入れさせるよりさらにもう一步積極的な行為です。苦しみに一息を入れた者にはアッラーは審判の日の苦しみに一息を入れさせ、苦しみから解き放した者にはアッラーは苦しみから解き放ち給います。」

さて、この審判の日に待ち受ける「苦しみ」は、現世においては誰も経験したことのないような苦しみです。「あなたがたは裸足で裸で割礼のない状態で集められます。」と預言者（サッラッラーファイヒワサッラム）が言われたので、アーイシャが「アッラーの御使い（サッラッラーファイヒワサッラム）よ、男も女も互いに見合うのですか。」と尋ねたところ、「事態はそんなことに気が回らないほど緊迫しているのです。」と答えられました。「太陽はしもべたちに

1マイルか2マイルほどまで近付き、彼らを溶かす。彼らは己の行いに応じて汗の中に浸かる。中には踵までの者もいれば、膝まで、さらには腰まで浸かる者もいる。中には口まで水が達する者もいる。」

この苦しみの日、苦しみを軽減するのは己の現世での行いです。

「審判の日、人類の頭上に太陽がある。そして彼らの行いが彼らを日陰に匿うか日に晒す」、「人は、人々の間に判決が下されるまで、己のサダカ（喜捨）の日陰に入って待つ。」

『不信仰者にとっては苦難の日である。』（第25章「識別」26節）

とアッラーの御言葉にあるように、この苦難はもっぱら不信仰者が被るもので、兄弟の苦難を軽くした信者たちにはこの苦難は軽いものとされます。「人に金を貸す商人がいた。負債に苦しむ者を見かけると、彼は使いの者に、アッラーが我らを大目に見てくださるかもしれないから、彼を大目に見てやるように、と言った。それでアッラーはこの男を免じ給った。」というハディースが伝えられます。アッラ

ーも次のように仰せられます。『また、困窮している者があれば（負債の取り立てを）余裕ができるまで待つこと。（帳消しにして）喜捨する方がおまえたちにとってはよいことである。もしおまえたちにこれがわかるなら。』（第2章「雌牛」280節）「困窮する者を猶予するか、取り消しにすれば、アッラーの日陰の外に日陰のない日、アッラーはご自分の日陰に彼を入れ給う。」さらに、現世においても報いは得られます。「祈りを聞き届けてもらいと願う者、あるいは苦しみを取り除いてもらいたいと願う者は困窮する者から苦しみを解き放ちなさい。」

「ムスリム（の恥部）を隠した者に、アッラーは彼を現世と来世において隠し給う。」これに似たハディースもいくつも伝えられます。例えば、「ムスリムの兄弟の恥部を隠した者には、アッラーは審判の日、彼の恥部を隠し給う。ムスリムの兄弟の恥部を暴いた者には、アッラーは審判の日、彼の恥部を家の中に押し入ってまでも暴き給う」、

「口先では信じるが、信仰が心にまだ入っていない者たちよ、ムスリムの陰口を言ってはならない。ムスリムの恥部を追跡してはならない。ムスリムの恥部を追跡する者には、アッラーが彼の恥部を追跡するであろう。そしてアッラーが恥部を追跡する者には、アッラーは彼を家の中まで暴き立て給う。」

それまで罪を犯したと知られたことのない潔癖な者に、過ちや間違いがあつたときには、それを明かしたり、暴いたり、うわさすることとは許されません。これこそ禁じられた陰口です。アッラーは仰せられました。『信仰する者の間に醜聞が広がることを好む者には現世と来世において痛烈な責め苦があろう。』（第24章「御光」21節）

罪の行為を犯したことを告白する者があつた場合、彼が悔悟しており、どんな行為かについては語らないなら、語らせようとはせず、戻って己の心にそれを秘めておくように諭すべきでしょう。預言者（サッラッラーフアライヒワサッラム）も、「私はハッド刑に触れて

しまいました。刑を私に執行してください」と言つて来た男に対し説明を求めようとはされず、礼拝後、再び彼が同じことを言つてきた時には、「あなたが私たちと一緒に礼拝したか」と尋ねられ、彼が「しました」と答えると、「あなたは許された」と言われました。また、別のある時、姦通の罪を告白した男に鞭打ちの刑を執行したのち、アッラーの御使い（サッラッラーフアライヒワサッラム）は、「人々よ、あなたがたにはアッラーのハッド刑が確定された。それらの不道德のなにかをなした者はアッラーの覆いに隠れなさい。アッラーの書が我らに明確にした者についてはアッラーの書の命令を執行するからです。」と言われました。

ただし、罪を犯していることが公衆の知るところになっている者で、己の犯した罪やそれについて人がうわさすることについても気に止めない者であれば、彼について語ることは陰口ではなく、彼を追跡調査し、刑罰を執行するべきです。

「しもべが兄弟の助けをする限り、アッラーはしもべを助け給う。」

バスラのハサンが友の一人をある男の難儀を救うために派遣した際、サービトのところに寄って彼を連れて行くように言いました。

そこで彼らはサービトのところにきましたが、彼は「私は今モスクに御籠り中だ」と言いました。そこで彼らはハサンの許に戻ってそのことを告げました。すると、ハサンは言いました。「彼に言いなさい。眼病人よ、おまえはムスリムの兄弟の難儀を取り除くための歩みが2度目のハッジよりもおまえにとってよいことを知らないのか、と。」そこで彼らはサービトのところに戻り、これを言うと、彼は御籠りを止めて彼らと共に出掛けました。

預言者（サッラッラーファイヒワサッラム）ご自身も日常的な手助けをよくされました。ビント・ハッバーブは、父のハッバーブが遠征に出掛けると、預言者（サッラッラーファイヒワサッラム）が家族のことを気に掛け、ハッバーブの家族のために羊の乳を搾って

くださったことを伝えています。

アブー・バクルもまた、一族の羊の乳搾りをしていました。カリフに任命された時、部族の隣人の一人は、彼は今はもう乳搾りをしないでしよう、と言いましたが、それを聞いたアブー・バクルは、「いや、カリフになったからといってこれまでやってきたことを変えたくはない」と言いました。または、「彼らは乳搾りを生業としてきた。ベドウィンは女が乳搾りはしない。彼らはそれを嫌うのである。そのため男が不在の時には女たちは乳を搾ってくれるものを必要とするのだ。」と言ったといひます。

ウマルもまた、未亡人を手助けし、夜中に水を飲ませてやったと伝えられます。タルハはウマルが夜中に女性の家に入っていくのを見かけました。そこで彼は昼間にその家に入ってみると、家には体の不自由な老女がおり、「夜中に来る男はあなたの家で何をしているのか」と尋ねると、「いついつのころから男は私の手助けをしてくれ

ています。彼は私の益になるものを持って来て、害になるものを除いてくれます。」と答えました。これを聞いたタルハは、「タルハよ、おまの母はおまえを亡くしたぞ（自責の表現）・おまえはウマルの恥部をついせきしようとするのか。」と言ったそうです。

教友たちもまた、人の役に立つことに骨惜しみをしませんでした。ある男がジハードの一団に連れ添いました。彼は彼が人々の世話をすることを条件と化しました。誰かが髪や衣服を洗いたいと思うと、彼はそれは私の務めだ、と言ってそれをしました。彼が死に、人々がグスル（洗淨）のために服を脱がすと、彼の手に、「樂園の民のひとり」と書かれてあるのに気づきました。よく見ると、その文字は皮と肉の間に書き込まれてあったということです。

逆に人の世話になることについては次の逸話がその非を語っています。教友たちのある者たちがアッラーの御使い（サッラッファアライヒワッサラム）のところにやって来て、彼らの友を高く称え

ていました。「彼のようなものは見たことがありません。旅にあるときにはいつでもクルアーンを読誦しており、家を訪ねればいつも礼拝しています。」それでアッラーの御使い（サッラッファアライヒワッサラム）は尋ねられました。「彼の土地を守っているのは誰ですか。」誰が彼のらくだや家畜に餌をやっているのかと聞くに及ぶと、彼らは言いました。「我々です。」すると言われました。「あなたがたすべての方が彼よりも優れています。」（続きは次号、インシャーアッラー）